

平成27年5月25日

「この人に聞く」成熟社会と建築

宗家花火鍵屋15代目

天野 安喜子（あまの・あきこ）氏

プロフィール 1970年東京都江戸川区鍵屋14代目の三姉妹の次女として誕生。1986年福岡国際女子柔道選手権大会銅メダル。1990年火薬類取扱保安責任者免許取得し、1993年より花火製造のため2年間の修行。1994年火薬類製造保安責任者免許取得し、2000年宗家花火鍵屋女性初の15代目を襲名。

2001年国際柔道連盟審判員資格取得し、2008年北京オリンピック柔道競技審判員

（日本女性初）を務める。2009年博士号取得

（芸術学：日本大学）。現在、講道館女子柔道6段。

日本最大の集客数である江戸川区花火大会のほか、浦安市花火大会、江東花火大会などで鍵屋の花火が楽しめる。



(C) タカオカ邦彦

（前文）

日本花火の老舗・宗家花火鍵屋の15代目、天野安喜子氏に花火の色表現などについて伺った。

■花火師の仕事

花火の特質には、色、形、光、音（リズム）の四つがあって、それらを組み合わせることで花火大会の演出をします。昔から花火師は、花火を製造し、花火の組み合わせを考え、打ち上げていました。しかし現在では、より高度な演出力が求められるため、大会や作品ごとにテーマを掲げて、そのテーマに似合った花火の構成、時間の経過を細かく演出、打ち上げていくことが問われてきています。従って工程を分担し、花火は製造していないけれども、デザインして打ち上げる方も花火師という位置づけになってきました。また、花火師の仕事は、この他にも主催者との打ち合わせや、許可申請書類の作成なども必要となってきます。そして時には音響効果にも拘り、音源の選曲をする場合もあります。

私は小さい頃から父の姿に憧れて「父のようになりたい」と考えていました。鍵屋では女人禁制の教えもありましたが、小学校2年生の時から「後を継ぎたい」と意識し、大学を卒業してから本格的に花火師の修行を積んで、鍵屋初の女性当主となりました。

「女性だから…」としての苦労は特に感じませんでした。将来十五代目になるといっても肩書だけでは通用しない世界ですから、職人さんとの信頼関係を結ぶには難しい面がたくさんありました。危険と背中合わせの現場で、大小問わずトラブルを解消できて初めて花火師としてのスタートラインに立て、そこから職人との信頼関係が生まれてきたと思っています。「鍵屋」は1659年の創業となりますが、「無駄な火を使ってはいけない」という先代の教えにより、安全を第一に、暖簾を守っていく覚悟でいます。

■花火のデザイン、演出

私のアイデアの源は自然です。デザインを考えるとき、気持ちが高揚していないと発想が出てこないのです。必ず打ち上げ現場へ行き「光合成をしよう」と言って、太陽の光に当たります。すると、体温の上昇とともに血のめぐりが活性化していく感覚の中で、アイデアが湧いてきます。さらに、そこへ自身にストックされていた自然の優しさや脅威などの様々な刺激の感覚をプラスして、花火という手段によって具現化していくのです。流行を追わずに、今自分が表現したいものを出したいので、他の花火大会を意識したことはありません。発想するときには童心に帰り、それ以降は経験と知識に基づき安全性を追求して、観客に喜ばれる花火大会になるように努めています。

今の花火の基本色は、紅（赤）、緑、黄色、青、紫、金、銀の7色で、これに中間色が入ります。また、同じ色を指定しても工場ごとに拘りがあり、つくる色合いが違いますので、多彩な色が表現でき、味わい深く、飽きが来ないですし、絵画を描く程度の自由度があります。そして花火を見て物語性が感じられるように構成していますので、細部まで色を変えていく必要性が今の時代は求められています。

かつて忙しい日常を送っていたとき「一度立ち止まって大きく息をしたい。」「肩の力を抜きたい」と安らぎを求めた時期がありました。そこで「和火」という焚火の色のような花火を研究し夜空に大量の「和火」を打ち上げた事があります。明治時代を中心に打ち上げられていた花火ですが、光が24時間溢れている現代に、あえて暗い色、淡い黄土色が、夜空から降ってくる演出に挑戦しました。花火を見終えた観客からは「暖かい感情が芽生えた」「何だか故郷を思いだし、涙が出てきました」との好評を頂きましたが、都会を中心に24時間明るい環境で生活する現代は、良い意味でも悪い意味でも、色のデザインに影響します。今年の

鍵屋は「光」、キラキラと点滅する煌きを追ってみたいと考えています。きっと優しい色の表現になると思いますよ。

また、私は音（リズム）に拘っていて、演出で人の心を動かすには間も重要だと思っていますので、現場では、着火のタイミングを手で振って合図を送ります。その場の観客の空気を読みながら、時には変化をつけながら、一つの大会で 200 回以上手を振って指示を出しています。

■思い出に残る花火

花火自体の出来よりも、観客と主催者と私たち花火師が喜びに対する一体感を持たせたときや、専門的な評価よりも観客の皆様から心のこもった言葉を頂いたとき、充実感があります。鍵屋は、現場ごとに全て演出を変えて、一つひとつを大事にしていますので、どの現場も印象的なのですが、中でも印象深かった出来事が二つあります。

一つは、2011 年の震災のときです。花火大会は中止が多く、千葉県浦安市でも液状化現象などで皆さん苦しまれていて、花火どころではないという意見もありましたが、「市民を元気づけたい」という市長の思いが強く、時期をずらして花火を打ち上げることになりました。ただ、多くの方が被害に遭われていますので、どう演出するか大変悩みました。音だけの花火で始まり、厳かでトーンを抑えた色合いの花火から徐々に音楽とともに盛り上げていくという演出で 1 時間打ち上げ終わった後に、「花火を見て勇気が湧きました。頑張れます。」という声を頂きました。演出に対し「被害に遭われた方に寄り添った演出になっているかなあ。」と少なからずの不安を抱えた中で打ち上げていたので、「お役に立てたんだ」という喜びがありました。

もう一つは江戸川区花火大会で、打上げと同時に豪雨が襲ってきました。もちろん花火は雨で全く見えません。そのとき、観客の皆様から「鍵屋、頑張れ」と鍵屋コールが起きたのです。それは 1 時間以上も続きました。「地元の皆様に、これほどまで鍵屋は支えられているのだ」と改めて実感し、感謝の気持ちで溢れたことを思い出します。そういった心の温かさを頂けた花火大会でした。

仕掛け人の私たちは、一つ喜んでいただくためには十の努力をしなければいけないというのが、いつも自分に課している言葉です。加えて、人に喜んで頂くものは、機械やデータに頼るのではなく、人が生み出していかなければいけないと常に思っていて、皆様にかけて頂く一言が、私の気持ちを熱く振るわせます。

花火師は 1 発を見られていることを意識して、その 1 発にもの凄く拘ります。これが日本の職人氣質であり、風物詩として伝わってきた日本の文化だということをお忘れずに守っていこうと思っています。